

## 「相承」—伝えたいという願い—

山形県 光傳寺住職 庄司憲昭

瑩山禪師700回大遠忌を明年に控え、掲げられたテーマが「相承」です。受け継いだことをお伝えするという意味です。伝えると一言と言っても、そうしたいという願いは一体どこから生まれてくるのでしょうか。

二祖峨山禪師が若かりし頃、師匠の瑩山禪師にこう問いかけられました。「あなたは、月が二つあることを知っていますか？」と。峨山禪師は「聞いたことがありません」と答えます。すると師匠にこう言われてしまいます。

「月が二つあるという道理がわからないようでは、教えの種をまき育てていくことはできない」と。

一見、答えようもないこの問いを、今の私として頂いてみます。まず一つ目の月とは、私がこの世にしようがいまいが、今日も天空に浮かぶ月があるという事実。そしてもう一つの月とは、私がこの世に生まれて来なければ頂くことが叶わなかった月です。それはこういうことです。

目を閉じてこんな言葉を耳にし、心に風景を描いてみる。

「中秋の名月、昼さながらに蒼々と、大地を照らすお月様」

この言葉を耳にして思い描く風景とエピソード。一人一人が心に浮かべる景色は、一つとして同じものではありません。更に、月と書いてツキと読み、心に絵を結ぶことができる私たち。実に不思議です。天空に浮かぶあの丸い物体は、自分が月と呼ばれていることすら知らないのです。そう名付けて呼んでいるのは私達だけです。

これが五感を総動員して心に頂いているもう一つの月の姿です。その風景にはありありと懐かしい思い出も結びついてきます。幼いころ眠れずにふと目を覚ますと、明るすぎる夜の景色、親と戯れに外に出て影踏みに興じた一コマ。今この場所に本体の月はないのに、心に描ける月の姿です。

読み書きを初めとして体験を重ね、更に共有することで伝え合える風景。これこそが先人に伝えられたもう一つの月の姿です。「二つの月」に込めた師匠瑩山禪師の願いとは、受け継いだ風景に気づくこと。それが「相承」—伝えたいという願い—に繋がる。ということであったかもしれません。